

計画・交通研究会

Association for Planning and Transportation Studies

会報 2014-3

発行日：平成26年3月31日

発行元：（一社）計画・交通研究会

目次

Opinion	1-2
将来世代へのレガシー（遺産）の創造	
News Letters	2-4
事業報告・活動報告	
Projects	5-6
プロジェクト紹介	
Members	6
会員紹介	
Backyard	7
事務局通信	

□ Opinion

将来世代へのレガシー（遺産）の創造

本多 均
(株)三菱総合研究所専務執行役員
社会公共部門長
1978年東京工業大学理工学研究科修了



アベノミクスの三本の矢により、ようやく「失われた20年」から脱し経済状況も好転しつつあるようだ。この流れに、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会が昨年9月に決定したことや、ソチでの冬季オリンピック・パラリンピック開催が続き、2020年に向けての話題も、日に日に増している。

その話題の一つに、耳慣れない言葉「レガシー（遺産）」がある。ちょうど50年前の1964年第1回東京大会は、社会・経済のみならず我々の文化・意識の中にも様々なレガシーを遺し、その基盤の上に今があることは言うまでもない。

なぜ、今レガシーが注目されるのか。実はオリンピック憲章にレガシーの規定が盛り込まれたのはつい最近の2002年のことであり、また首都で2回以上開催された例が3か国に限られていることであろう。そして、それ以上に、我が国にとって、第一回大会を契機に先進国へと飛躍したのに対し、第二回大会決定を契機に、未曾有の東日本大震災から復興し、高齢化と人口減少下の成熟国としていかなる将来を目指すべきかを、国民皆が考えていることの表れだろう。

では、このレガシーとはどのようなものだろうか。毎回この会報を楽しく読んできたが、HP上にある2001年以降の本会報「Opinion」約70件を今一度読み直してみた。ざっと整理

すれば次の通りになる。

まず、2030年、2050年を見据えて、次世代に引き継ぐべき国土や都市の将来像。国土像は、首都直下や南海トラフ巨大地震、年々激しさを増す異常気象と災害など、国土の脆弱性に備えるべく防災・減災を基本に置くこと。都市像は、子供や高齢者にとって安全で安心して歩きたくなる、電柱や架線もなく、水や緑が豊かな暮らしやすい市街地へ転換すること。加えて東京一極集中の是正と地域振興にも資する地域間、都市間の重層的かつ広域的連携を徹底すること。

第二が、既存インフラの老朽化対策。第一回東京大会で整備された東海道新幹線や首都高が整備後50年を迎えるなど、既に老朽化した膨大な既存インフラを、上記の国土や都市の将来像に照らして的確に維持更新すること。

第三が、これらの進め方。目標とする国土や都市の将来像を国民と共有し、部分最適でなく全体最適を意識し、明確に、時間軸上で投資規模にも留意した戦略やロードマップに落とし込むこと。

このように基本的方向は語り尽くされているが、さらに次の点も留意して、第二回東京大会の成功と、レガシーを遺すべく取組みたいものである。

一つ目は、これだけ高齢化が進んだ我が国でパラリンピックが開かれるということだ。今後、

医療・介護に係る新たな産業も生まれると期待するが、高齢者等の健康・医療・介護にも資する街づくりという視点がより重要になる。二つ目は、訪日外国人の安全・安心だ。訪日外国人は1000万人を超え、どこの観光地でも見かけるようになった。大災害への備えは待ったなしの状況だが、多言語表記などのサインのあり方に留まらず、万一の災害時に外国人を避難誘導するための準備を進めたい。三つ目が、ICTの社会実装だ。ようやくマイナンバー制度が

2016年から運用開始される。これを契機に、社会基盤を含めた国民の生命・財産を守り、かつ訪日外国人の受け入れ環境としても有用な、日常的な監視、また災害時、事故や犯罪発生時にも資する社会システムへのICT実装を徹底したい。そして最後が、多くの企業や組織の活動も、また産官学連携も縦割りの取組みに留まっているとの意見も多いが、広く経済界、産業界と協働し、国民から共感を得つつ進めたい。

□ News Letters

事業報告・活動報告 □

第4回 イブニングセミナー

「東京オリンピック開催(2020年)に向けたインフラ整備の考え方と見通し」

今年度第4回のイブニングセミナーは、2020年に開催の決まった東京オリンピック・パラリンピックに向けたインフラ整備の考え方と見通しをテーマに、東京都都市整備局の佐野克彦理事および日本大学の岸井隆幸教授にご登壇頂き、2月25日に日本大学理工学部駿河台キャンパスにおいて開催されました。



○「大会概要ならびに施設・インフラ整備計画」

(東京都都市整備局 佐野克彦理事)

東京都においてオリンピックの施設、インフラ整備計画を担当されている佐野理事からは、2020年のオリンピックの開催前1年間はテストイベントを予定されていることから、実質5年

半という準備期間で取り組む計画についてご説明を頂きました。

最初に、招致にあたってアピールした3つのビジョン ①安心・確実な大会運営を行う“Delivery”、②世界中を魅了するダイナミックな祭典とする“Celebration”、③革新がもたらす未来への貢献の“Innovation”についてご紹介がありました。

次に、会場配置コンセプト（新たに建設されるオリンピックスタジアムを中心とした1964年東京大会のレガシーが集積するヘリテッジゾーン、メディアセンターを中心とした未来に向けて発展する東京の姿を象徴する東京ベイゾーン）についてご説明頂いたのち、それぞれに配置される主要施設について、パース等を利用し、ご紹介いただきました。

続いて開催期間中の輸送計画として、大会関



2020 東京大会の戦略的課題

競技施設の整備と2020レガシー

選手村の整備と活用

交通インフラの整備と活用

アジア・スポーツビジネス拠点の確立

高齢社会 東京モデルの確立

待される品川エリアのポテンシャルや、具体的な都心の大規模公園を例に挙げられ、ご説明頂きました。

最後に、これまでのお話を踏まえ、2020年の開催に向けて取り組むべき戦略課題を、①競技施設整備と2020レガシー、②選手村の整備と活用、③交通インフラの整備と活用、④アジア・スポーツビジネス拠点の確立、⑤高齢社会東京モデルの確立、と整理頂き、特に、オリンピック開催の決まった今後は④⑤について、確実に取り組んでいき、世界に発信していく必要があるとまとめて頂きました。

○講演をいただいた後に、当研究会元会長の中村英夫東京都市大学名誉総長および森ビル株式会社の稗田執行役員より今回のテーマに関連し、お話を頂きました。

まず、中村先生から、考えなければならない大きな課題として2点挙げられました。

一つ目は、オリンピックを控えての災害への対応の必要性です。オリンピック開催期間だけではなく、その事前準備の段階での発生の可能性等も踏まえて十分な検討が必要とのご指摘を頂きました。

二つ目は、東京の景観を改めて見直す必要性です。マラソンのコースにもなっている外堀通り、日本橋地区を例に出され、世界に恥じない

景観を形成するよう皆で考えることが必要とのご指摘を頂きました。

続いて、森ビルの稗田執行役員より、オリンピックの会場配置コンセプトに位置づけられたヘリテッジゾーンと東京ベイゾーンを結ぶ中心に位置し、オリンピックにおいても重要なインフラとなる環状2号線とそれと併せて開発されている虎ノ門ヒルズの計画について、詳細にご紹介いただきました。

○その後質疑応答を行った後、当研究会前会長の森地茂政策研究大学院大学特別教授より、オリンピックは、東北の県、市町村も巻き込んで開催することもぜひ検討頂きたいとの期待が示され、講演会を閉じました。

講演会後は、岸井先生をはじめ多くの会員の方々にご出席頂き懇親会が盛大に開催され、各所でオリンピックに向けた期待の話に花が咲いていました。

今回の講演会を通じ、会員の皆様もオリンピックに対して更なる期待が膨らんだとともに、多くの課題があることも改めて認識したのではないのでしょうか。講演頂きました佐野理事、岸井先生には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

(文責：国富 剛 (三菱地所(株)))

前号からスタートした『会員紹介』に続き、今回より新企画第2弾『プロジェクト紹介』を始めたいと思います。全国（時には海外）の様々なプロジェクトを対象に、関係者への独占取材により、新聞や雑誌ではあまり明かされていないようなご苦労や工夫、裏話などをレポートして参ります。また、皆様により一層興味を持っていただけるよう、取り上げるプロジェクトは、可能な限りイブニングセミナーや見学会などと連携したものとしたいと考えています。この企画が、今後皆様が様々なプロジェクトを計画なさる際のヒントを与えるものとなれば幸いです。

（編集委員 鳩山紀一郎（東京大学））

環状第二号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業（東京都施行）～虎ノ門ヒルズ～

かつて江戸城の南端の門が位置していた「虎ノ門」。ここに地元の永年の悲願である「新しい街」が出来上がります。しかも単なる高層ビル建設でも、単なる街づくりでもない、道路と再開発が融合した全く新しいタイプのプロジェクトが、今や完成直前まで漕ぎ着けられています。

虎ノ門・新橋地区と臨海部をつなぐ道路計画が都市計画決定されたのは昭和21年のことで、マッカーサー道路と言われたこの道路の幅員は

100m。さすがに昭和25年に幅員40mに変更されたものの、この道路事業の実現までには長い道のりを要しました。それを可能にしたのは平成元年の立体道路制度の創設で、道路の上に街があると言うべきか、ビルの中に道路が飛び込んでくると言うべきか・・・、道路と再開発のコラボレーションにより、この新しい街は出来上がりました。

名付けて「虎ノ門ヒルズ」。汐留から虎ノ門までの約1.5kmの地下道路トンネル（地上部は緑豊かで魅力ある「新虎通り」）の虎ノ門側のⅢ街区に、オープン間近の地上52階建て247mの超高層ビルがそびえ立っています。低層階は店舗（5層）、中層階は事務所（30層）、高層階は住居（10層、174戸）とホテル（6層、162室）の超



虎ノ門ヒルズと新虎通り
（写真提供：森ビル）



地下道路への入口部分
（写真提供：森ビル）

高層ビルの最大の特徴は、建物の地下部分を道路（環状2号線）が貫いていること。虎ノ門側から見ると、高幅員の道路がビルに吸い込まれていく、子供の頃にアニメで見た「未来都市」のような光景に目が釘付けになります。街区内に6,000㎡もの広場を設置すること等による公共貢献と容積移転（Ⅰ・Ⅱ街区から）により容積率は1,150%も確保されていますが、決して見るものに圧迫感を与えないのは、スレンダーで美しいデザインが実現出来たからだと思われれます。地下道路トンネルに不可欠な換気塔も、ビルの景観にマッチするデザインで作られています。見る者にとって特に印象的なのが広場に掛かる大屋根で、降雨や日射に影響されない空間を作り上げ利便性を高めています。

東京ミッドタウンタワー（248m）に1m及ばない東京都内2番目の高さという、あえて1番にこだわらずなんと「奥ゆかしい」虎ノ門ヒルズ。工事着手から3年、事業計画決定から12年の時を



懇切にご説明くださった森ビル長尾課長(左)と、取材中の計交研井料・鳩山編集委員(右) (撮影 同多田)

経て、今年6月にオープンを予定しています。霞が関でもなく新橋でもない、絶妙な立ち位置の御当地・虎ノ門の新たなランドマーク。

ご自分の目でじかに確認されるためにも、是非とも4/2の見学会にご参加を！！

※ 忙しい中、取材にご対応くださった森ビル株式会社関係者の皆さま、どうも有難うございました。

（編集委員 井料青海（東日本旅客鉄道(株)）

□ Members

会員紹介 □

古川公毅 さん (IHインフラシステム(株) 顧問)

当研究会の初代会長、八十島先生に大学で卒論の指導を受けたのち、東京都に入って主に道路・鉄道の交通計画畑を歩み、要の建設局長を務められた。幾多の仕事の中では、JR中央線連続立体交差事業で地域、JR東日本、中央官庁との重々しい折衝を切り抜けたことと、平成12年に噴火した三宅島での都道復旧や泥流対策の砂防工事など災害復旧に危険と隣り合わせの中で取組んだことが思い出深いそうです。

東京都を退職後も、社会インフラづくりへの熱意は一段とスケール大きく、また長期的な視点をもって発露されています。なかでも、首都高速がなぜ今のように都心に至るきめ細かな4車線ネットワークを形成したか、その計画思想の歴史的事実を掘起こし、欧米の大都市との対比やアジア大都市への波及などについてみずから現地踏査もして分析し、森地・家田両先生ご指導のもと博士論文にまで纏められた。その底意には、若い人たちへの技術継承の真摯な使命感がうかがわれます。

と、これだけ紹介すると、業務一途の融通のきかない熱血の行政マンと思われるかもしれませんが、然にあらず、じつに謙虚で東北人のような物静かでいぶし銀のような方。九州男児には賑やかな方が多いですが、満洲の東北の奉天のお生まれでした。大連でのEASTS大会で知り合い、同じ大地の子の私もつい親しみを覚え、大連の倉庫で埃を被っている旧満鉄のシンボルの機関車アジア号をコッソリと見に連れて行っていただいた。心豊かな方で、最近は日記がわりに短歌づくりを楽しまれており、その珠玉の作の中からつぎの一首をいただきました。

中央線高架になりて車窓より多摩の家並と新春の富士

（水野高信 日本工営(株)）

□春の現場見学会のお知らせ

本号で報告したイブニングセミナーのテーマと連動した企画として「東京オリンピック会場予定地の確認とインフラ対比（1964→2020）による知見の発掘」をテーマに4月2日（水）午後に現場見学会を開催します。東京都にご協力をいただき、晴海選手村予定地→お台場地区（下車予定）→夢の島→海の森→虎ノ門ヒルズ・環状2号線建設地（下車予定）→青山通り→国立競技場（下車予定）を観光バスにて回る予定です。

また、懇親会の冒頭に15分程度のミニセミナーを予定しています。

話題提供者 青山学院大学 教授 井口 典夫 様
 テーマ 東京オリンピックで得るものと失うもの

□総会の日程のお知らせ

総会の日程が決まりましたので、お知らせします。

日 程 4月22日（火） 18：00より
 場 所 霞が関ビル35階 富士の間

総会後にはイブニングセミナーを同じ「富士の間」で開催します。その後、懇親会を隣接の東京倶楽部ビル2階レストラン「カスミガセキ」で開催いたします。

現在、開催のご案内をさせていただいております。4月11日（金）まで参加申込みを受付けておりますので、多数のご参加をお待ちしております。

□平成26年度 第1回 イブニングセミナーのお知らせ

4月22日の総会後に下記内容で平成26年度 第1回 イブニングセミナーを開催します。

テ マ パッケージ型海外インフラ事業の今後のあり方を問う
 ～モンゴル・ウランバートル空港プロジェクト等を例にとり～（仮）
 趣 旨 パッケージ型海外インフラ事業においてEPC（Engineering Procurement Construction：ターンキー）やPPP（Public Private Partnership：官民連携）という事業形態をとる場合の現状と今後について議論します。
 話題提供者 三菱商事(株) 森脇祥一郎 様
 千代田化工建設(株) 南部 泰治 様
 ファシリテーター 鹿島建設(株) 中山 等 様
 鹿島建設(株) 橋本 麻未 様

□平成26年度 第2回 イブニングセミナーのお知らせ

現在、「気候変動枠組条約のCOPを中心に、環境問題を考える」（仮称）のテーマで7月に平成26年度 第2回 イブニングセミナーを開催することを検討しています。

一般社団法人 計画・交通研究会

副幹事長兼会報編集委員長 日比野 直彦
事務局長 高橋 祐治

〒100-6005

東京都千代田区霞が関3-2-5 霞が関ビル5F-28

TEL=03-4334-8157 FAX=03-4334-8158

E-Mail=jimukyoku@keikaku-kotsu.org

Homepage =<http://www.keikaku-kotsu.org/>
